



養秀

夕日武者

中山義秀

新潮社

者武日夕

昭和二十九年五月二十一日 印刷
昭和二十九年五月二十五日 發行

定價貳百七拾圓

地方
賣價 貳百八拾圓

著者 中山義秀

發行者 佐藤義夫

東京都新宿區矢來町七一

發行所 新潮社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京三四局代表七一一
振替東京八〇八番

亂丁・落丁のものは本社又はお買
求めの書店でお取替へ致します。

印刷 大日本印刷株式會社 製本 神田 加藤製本所

Printed in Japan

夕
日
武
者

裝
幀

青
山

二
郎

櫻花

一

京都は今、花の盛りである。

祇園、眞葛野、清水、地主権現の境内のあたり、行樂の群集でにぎはつてゐる。

應仁、文明以來、百年もつづく戰亂に、人々はあきあきしてゐた。

働いて財寶をつめば、たちまち武士に奪はれてしまふし、戰爭がはじまれば家も人も焼きはらはれる。

明日の命が、はかりがたい。それで生きてゐる間に、できるだけ生を貪り、生を楽しもうといふ氣持になる。

土地も都も荒れはてたやうに、人々の心もすさんでゐた。ただ自分の利をはかるばかり、そのためには主も親も妻子もなかつた。

しかし時勢はいつの間にか、眼に見えず落著きをとirmoshiはじめた。動亂から安定へ、無秩序から統一へ、氾濫した洪水がしだいに、一つの大きな流に吸収されてゆ

くやうに、新しい方向へ進んでゆくやうに思はれる。

昨年の永祿十一年九月、織田信長が岐阜から上洛して、京都を支配してゐた三好、松永の徒を追ひはらひ、足利義昭を十五代の將軍におしたてた。

信長はこの新將軍のため、二條御所の焼け跡に、今大宮殿を建築中だ。さらに正親町天皇のため、内裏の修築に著手してゐる。天下統一の大望を、眼のあたり世人に誇示しようとする、信長一流の思ひきつた宣傳である。

これ等の大工事に、京都周邊十四ヶ國から、二萬人の大衆があつめられ、洛中はその景氣でわきたつてゐる。

そのせゐか、花見の群集の顔色は明るく、活氣がただよつてゐる。

群集の姿は、種々さまざまだ。布子著の町人がある。折烏帽子に、狩衣の裾をたくしあげた職人がある。武士、僧侶、腹巻に長柄などもつた鎌髭の下郎。それ等をいろいろ、貴賤の女人の群。

その中にひときは目立つ長身の武士が、悠々とした足どりで、清水の境内をのほつてくる。

身の丈五尺七、八寸もあるとみえ、平人より首だけ高い。深編笠をかぶつてゐるので、顔はわからないが、肩幅ひろ

く胸あつく、堂々としてゐて逞しかつた。

咲きほこる櫻樹の下によりそつて、參詣の群集の姿を被衣の下から見まもつてゐた二人の女性のうちの一人が、その武士の姿に眼をとめ

「おや、^{しがらみ}柵、あのお方は……」

さういふなり、やにはに相手の手をにぎりしめた。柵とよばれた、侍女らしい女は

「どなたで御座りますか？ おお、あのお方——」

「あれは、あれは」

と言葉を區切りながら、息をのんで

「山中様ではないかえ」

「さういへば、あの背恰好、歩きぶり」

柵はかけ出さうとして、引留められた。

二

^{しがらみ}柵をとめたのは、前の女性である。

「人違ひしては大變、後をつけて——」

さう囁くと柵はうなづいて、相手の手を取り、群集の中にまぎれ入つた。

深編笠の大兵の武士は、清水寺本堂の前になると、佛前

にぬかづいて祈念をこめた。それから地主権現のはうにまゐつて、これにも熱心な祈願をささげる。

清水寺、地主権現、ともに坂上田村麿の創建するところ。田村麿は東夷を征するにあたつて、これ等の神佛に加護をいのり、種々の奇瑞があつた。

清水寺の本尊は、千手千眼の十一面觀世音。地主権現は^{おほなむろのみこと}大己貴命、^{すさのおのみこと}素戔鳴尊、その妻^{いなたひめ}稻田媛、その兩親、^{あしなうち}脚摩乳、^{てなう}手摩乳を祭神にしてゐる。いづれも、出雲の古い神々達だ。

このあたり社殿も佛堂も、うす紅の花の雲につつまれてゐる。背後の山も眼下の境内も、いちめんの櫻花。

武士は清水寺本堂前の舞臺にたち今をさかりに咲きみちてゐる、山上山下の櫻花をながめながら、はるかに西南をのぞんで、ひとしほ感慨にたへないでゐる様子。

右手に扇をにぎり、左手に編笠の縁をとつて上にかかげ、かなり長い間、身じろぎもせず佇んでゐる。背後で二人の女性が、彼の姿に眼をとめてゐることなど、さらに氣づかない。

武士はやがて舞臺を下り、境内を出た。そこに従者らしい、若者が待つてゐる。

「彦九郎、大儀であつた。これから祇園へおりて、ゆつく

り酒など酌まう」

祇園社のあるところは、眞葛ヶ原である。ここにも櫻樹が多い。吉木の泉がたまつて池をつくり、白川が近くを流れてゐる。

こゝも花見客で賑つてゐるが、地域がひろいのでそれほど雑沓はしてゐない。南は深い森の木立で、北は山、東西がひらけてゐる。

池のほとりに、掛茶屋がある。武士は従者をつれて、その一つにはひつた。編笠をとると、色白の青年武士である。二重瞼の眼が人なみより大きくて、鋭く光つてゐる。それで一睨みされたら、たいていの者は眼をそらさずにはゐられまい。

鼻が隆く、口許が一字にひきしまつてゐる。意志の強い證據だ。髻の根を絹の黒紐で固くむすび、後にピンとたててゐる。毛深い質とみえて、こめかみから頸へかけ刺つた髻跡が、青々としてゐた。

身體つきが大柄で表情がおとなびてゐるため、齡の頃三十ばかりにみえるが、じつさいはまだ二十五、六歳であらう。

酒をとりよせ、若者を相手に、盃をくみかはしながら

「こゝは山櫻や枝垂櫻が多いが、また一段の風情であるわい」

武士の聲はさわやかで、落ちついた響がある。

「左様でござりまするか。手前には清水寺の櫻のはうが、はなやかで宜しいやうに思はれます」

三

従者の若者はまだ二十歳前で、膝までしかない短い小袖に、二尺にあまる脇差を腰にさしてゐる。

主人の武士におとらず體格がよく、面つきも精悍だ。親しい主従の間柄とみえて、いふことにも遠慮がない。

そこへ被衣で顔をかくしながら、二人の女連が店へはひつてきた。彼等の背後に少しはなれて座をしめたが、主従はふりむいても見ない。

茶屋の傭が茶をはこんできたのをしほに、女連の一人は被衣をとつたが、他はそのまま。

「お嬢様、かつぎをおとり遊ばせ」

さう云つてすすめると、相手は無言で首をふる。そのくせ背後にある武士に、ひどく氣をつかつてゐる風である。

「なんのもう、御遠慮なぞ……」

すすめた女は、ひくく囁きながら微笑する。年は三十七、八歳、美しくはないが、しつかり者らしい。

二人が茶をすすつてゐると、池のかなたの櫻の下で、鼓の音がおこつた。一人の女が扇をひるがへして、舞をしてゐる様子だが、見物人がまはりを取巻いてゐるので、姿は見えない。

祇園社のはうから、多勢で踊つてゐるやうな、賑かな囃子の聲もつたはつてくる。

武士が、盃をあげて云つた。

「彦九郎、京の花見も、これで當分見をさめた。明日は、御室へでも行つてみるか」

「何處へでも、お供つかまつります」

若者の返事は、威勢がいい。姫とよばれた女は、その話を聞くとびくりとした。思はず被衣をとると、中から鬢そぎした黒髪と、玉のやうに白い顔があらはれる。

近頃元服したばかりの處女である。十七歳とはなるまい。頬の豊かな長めな頤の、ぼつてりとした美しさ。なで肩の身體も、ふつくらと丸味をおびてゐる。

「柵、早う御挨拶して……」

こんどは姫のはうから、侍女に催促する。柵はうなづい

て、武士に聲をかける。

「かやうな所で、失禮ではござりますが、山中のお殿さまではござりませぬか」

「やア」

武士は後をふりむいて、柵をみた。柵は畏つて禮をしなから、頭をあげない。

「どなたで御座る」

「龜井の薫でござります。久しうお會ひいたしませぬ」

姫がかはつて答へながら、これも丁寧に挨拶する。顔がまつ赤になり、後のはうの言葉は、口の中に消えてよく聞えなかつた。

武士はびつくりして、姫の姿をしげしげと見おろしながら

「おお、龜井殿の御息女。大きうなりましたな」

口ではさう云ひながらも、山中の顔も知らず知らず赧くなる。薫姫が見違へるばかり、妙齡の女と變つてゐたからであらう。

四

山中とよばれた大兵の武士は、山中鹿ノ介幸盛である。

當年二十五歳。

薫姫といふのは、龜井能登守安綱の長女、芳紀十六歳。

二人は許嫁いひめけの間柄だつた。

龜井、山中、ともに尼子の一族である。尼子はまた、宇多源氏といはれる、近江の佐々木氏の一族である。

佐々木源氏は後、六角と京極の二氏にわかれるが、尼子は京極の系をひき、五代目の經久の時、山陰、山陽兩道十一ヶ國の太守となり、二百五十萬石を領した。

その子の晴久になつて、安藝の毛利元就に領地を蠶食され、八ヶ國に減つたが、なほ二百萬石の大領主だつた。

龜井家は尼子御一門衆の一として、三萬八千石をうけ、山中家は中老衆として、二萬石を受領してゐた。

鹿ノ介の父三河守滿幸は、彼の幼時のころ、二十七歳で亡くなつた。鹿ノ介には幼名甚太郎、後に幸高と名乗つた兄と妹がある。

次男の鹿ノ介は、龜井家にもらはれ、薫の婿となる筈であつた。薫がまだ成人しないため、二人の結婚が實現しないのである間に、尼子氏は晴久の子義久の代になつて、元就に攻めほろばされた。

この時から三年前の、永祿九年十一月二十八日である。

薫の父龜井安綱は、落城前に城内を逃げおちて、近江の一族六角承禎にたよつた。

その折薫姫は、十三歳の少女だつた。それからあしかけ三年見ないである間に、すっかり大人になつてゐる。しかも、牡丹櫻の風情にも似た濃艶さ。鹿ノ介の驚くのもわりはない。

「これが、自分の妻になる人だつたか」

さう思ふと、鹿ノ介の若い血がときめく。姫はなほさらであらう。名乗るまでは被衣をかぶつたまま、鹿ノ介に後ろむきになつてゐたのに、今は飛びつきかねないばかりに、彼の前にすりよつてゐる。

人目を憚るたしなみも、羞づかしさも、いつか忘れてしまつた。三年間相見なかつた、戀しきなつかしさで、胸がいつぱいになつてゐるらしい。ことに自分の良人だと思ふから、すこしも遠慮しなかつた。

鹿ノ介にしてみると、姫が美しいだけに、すぐ前に近よつてこられると、惱ましくてならぬ。身をよければ、姫から冷淡だと恨まれさうだ。

間ちかに向きあつてみると、姫の黒髪にぬつた丁子ちんしや、衣裳にたきこめた伽羅きゃらの匂が、彼の鼻を刺戟してくる。

額から左右にたれた兩鬢を、耳のところで短く切つてある恰好も、なまめかしい。兩鬢をそぐのは、一人前の女になつたといふ元服のしるしである。

隆い鼻の下の肉が短く、下頤のややそとぎみに、白くつきだしてゐるのは、すんなりした喉もととともに、さも異性の愛撫をうけたがつてゐるやうに可愛らしい。

いかなる勇士も恐れぬ鹿ノ介も、これにはたじたじだつた。戦には強いが、女にはまだ初心な青年である。

五

鹿ノ介はてれかくしに、盃の酒をのみほして姫にさした。

「お互に無事でなにより。お祝に一杯御獻じ申さう」
姫はためらつて

「あのお酒は——」

と手をだししづつてゐると、侍女の柵しがらみが後から

「有難く、頂戴なされませ。私がお酌致します」

柵は銚子をとつて、姫の盃になみなみとつぎ

「それ、おかためのお盃お盃」

と笑ひながら、眼くばせする。

「まア柵、そちはいやなこと」

それでも姫は嬉しうに、眼をつぶつて酒をのみほした。

「お姫さま、すんだら山中様に御返盃」

柵は側からまた、姫に注意する。鹿ノ介が盃をうけとると、それへも彼女は酌をして

「も一つ、お姫さまにおさしなされませ」

年増の彼女は、鹿ノ介と姫の間の取持でもしてゐるやうに、二人をけしかけてゐる。

「もう、よからう」

鹿ノ介はさすがに苦笑して、一人で盃をあげながら、それでも氣持がくつろいできたらしく、姫にやさしくたづねた。

「和殿たちは、あの後どう致された？」

「はい、富田のお城を出まして後、六角様をたより、近江の觀音寺のお城に居りました」

「觀音寺城は去年の九月、信長のために攻め落された筈

——」

「いいえ、信長に攻められる前、六角様父子は城をすてて、石部に退去したのでございます」

「ではお父上も御一緒に、石部に隠れておいででござるか」

「それが……」

姫は涙ぐんで、鹿ノ介をみつめながら

「父は城を出ますと、寺にはひつて世を捨てました」

「なに、安綱殿は世を捨てられたと！」

姫は面目なげにうつむいて

「私の口から父のことを申すのも、おはづかしうございますが、父は私達が可愛いあまり、富田の城を出て敵にくだりましたことを、後にはたいへん後悔してをりました。

そして六角様をたよりましたものの、二年たらずでまたもや信長に城を奪はれ、すっかり世の無常をかんじた模様でございます。寺に入つて僧となり、今は行方が知れませぬ」

「して、和殿たちは、今何處に？」

「妹と二人で知るべの家をたより、深草のほとりにわび住ひをしてをります」

「母御前は、いかが致された？」

「母は一年前、病氣で亡くなりました」

「それは、かへすがへすも……」

鹿ノ介は姫の身の上に同情して、それぎり言葉が出ない。戦にやぶれて他郷に流離する、武士の不幸は骨にしみて知つてゐるからだ。

六

出家したといふ龜井安綱の父、能登守秀綱は、尼子の一門に席をおく元老だつた。

これから四十六年前の大永三年の夏、毛利元就が二十七歳で本家の跡をつぎ、安藝の吉田三千貫の城主になつた時、騒動がおこつた。

元就の弟元綱が、尼子の重臣龜井秀綱とむすび、元就を仆さうとした。その陰謀がもれて、元就は弟を殺し、尼子と手をきる決心をした。

それまで小城主の毛利家は、尼子について山口の大内家を攻めた、尼子の手先にすぎなかつた。

この十一年後の天文三年、元就は公然と尼子と手をきり、敵方の大内家に寝がへつた。そして三十五年後の永祿九年、つひに尼子をほろぼすことになる。

思へば秀綱の策動は、主家の尼子を亡ぼす遠因をつくつたやうなものである。しかし秀綱から云へば、彼は元就の

有能な武將であることをおそれてゐた。それで主家の將來のため元就を、雙葉^{ふたば}のうちに枯らさうとしたのである。

また元就は、尼子經久の後の晴久が、凡庸な大將で、ともに頼るに足らないことを見抜いてゐたから、大内に寢返つたのだ。

尼子が十一ヶ國の太守だつた時、その部下の兵は四萬餘騎にのぼつた。元就はこの大家を倒すのに、ほとんど全生涯を費した。

元就がはじめて尼子の領地、出雲に攻入つてから二十四年、しだいにその手足をもぎ、尼子の本據である富田の月山城を圍んで、つひに攻落すにいたるまでが約五年。

富田の月山城には、はじめは二萬ちかい兵がこもつてゐた。それが元就のため糧道をたたれて兵糧攻めにあひ、士卒の大部分が逃亡し敵にくだつた。

餓死におそれながら、最後まで城にふみとどまつてゐたのは、二十三人の僧侶をのぞいて、軍兵わづか百十四人である。

主君の尼子四郎義久、その兄弟九郎倫久^{みちひさ}、八郎秀久のほかに、家老河副美作守とその一家、中老高尾、森脇、宇山、立原源太兵衛久綱、山中鹿ノ介幸盛、大西十兵衛、津森宗

兵衛、横道兵庫之助兄弟などである。

薫姫の父、龜井安綱は、その前妻子家人^{けいじん}をひきつれ、城をぬけて敵にくだつた。

元就は最初の間、城内の糧食を盡くさせるために、城兵の逃亡をきびしく監視した。後にいよいよ糧食がつきたしてみると、こんどは三つの城門の人目にたつところへ制札をかかけ、投降する者はすべて命を助け、身柄を自由にすると廣告した。

それで城兵が、毎日二百三百と投降した。それをふせぐために、城内では番兵をおいたが、その番兵まで一緒に逃亡する。

たうとう二萬ちかい兵が、百十四人となつた。これでは城を守らうにも、守りやうがない。

義久が敵の軍門にくだつた時、山陰の天地は冬雲におほはれ、月山には雪が降りだしてゐた。鹿ノ介はその時のいたましい光景を、忘れようとしても忘れることができない。

七

三年前の永祿九年の冬、主君の三人兄弟は板輿にのせら

れ、父祖三代八十餘年住まれた月山の城をでた。

後にしたがつ侍六十九人。その中には立原久綱、山中幸盛、三万屋藏人、秋上伊織介、横道兄弟など、尼子の十勇士とうたはれた人々がある。

彼等を吉川元春、小早川隆景の従兵一千餘りが警固してゐる。戦勝の兵と敗残の城兵と、その對照がいちじるしい。

城をくだり富田の流をわたつて一行は出雲の大社へ道をとる。大社へ廻り道するのは、毛利軍が社前に戦勝の報告をするためだ。

城兵は城下をさるにあたつて、いくども後をふりかへりお城への名残りを惜んだ。

城がまつたく孤立してしまつてから三年間、主君以下百十餘人になるまで、城兵は堪へに堪へた。その間の苦勞を思ふと、萬感胸をふさぐものがある。

月山城は山下に富田川をめぐらせ、中腹に太鼓壇の廣場をいだし、六百尺餘の高さをもつて、彼方の空にそびえたつてゐる。

霏々とふりしきる粉雪に、山頂の甲の丸にたつ物見櫓も御殿の白壁も、暗くとざされて定かにはわからない。

山下の平地や谷口には、侍屋敷や町人街、宿老等の居館がある。かつて十一ヶ國の太守の城下町として、殷賑をきはめたところだ。それも雪にふりこめられて、無人の町のやうに静まりかへつてゐる。

誰も言葉にはださなかつたが、たがひに見かはす城兵の眼に暗涙があつた。主君の三人兄弟は毛利の本國の安藝に幽閉され、家臣等はちりぢりばらばら、つぶさに流離の艱難をへなければならぬ。

ふたたび故郷の城にかへつて、昔の榮華をくりかへすところがあるだらうか。去つた日が二度ともどつて來ないやうに、彼等の未來はこの雪空と同様見通しがつかない。

城のはうから、ドン、ドン、ドンと太鼓の響が、かすかに傳はつてくる。城兵と入れかはつて入城した毛利の兵が、時刻をしらせるため打出してゐるに相違ない。

毎日毎時聞きなれた、大太鼓の響を耳にすると、城をはなれてゆく城兵の足は、一層重くなつた。

「あはよくば、主君を途中で奪ひかへして……」

彼等は云はず語らず、そのやうな思ひをいだいて、黙々と主人の興の後についてゆく。彼等をとりにまく毛利軍一千餘騎は、また反對の心だ。

毛利軍は將來の禍根をたつため義久はじめ尼子の城兵を、みな殺しにするつもりだつた。事實二萬數千の軍兵をもつて總攻めたすれば、飢餓によるめてゐる一握りの城兵など、踏みつぶすことなど何でもない。

城兵を助けたのは、毛利元就の佛心である。彼は殺戮を好まなかつた。昔尼子の手先となつて働いた舊縁を考へ、義久以下の命を救つたのである。

八

一行は大社のある、杵築の町に一泊した。翌日義久たちは安藝におくられ、家臣たちとは離ればなれになる。

安藝の毛利の本據、吉田城にちかい長田の圓妙寺に、義久兄弟の配所が用意されてゐる。配所のまはり二重三重に矢來垣をめぐらせ、警固の兵を置いて、義久等は一步も外へ出さず、外からは誰も近づけないやう、嚴重な手配がしてあつた。

義久等に隨行する家臣は、大四十兵衛、多賀勘兵衛、津森四郎次郎の三人にかざられてゐたが、ほかの家臣等のたつての願で、立原久綱の父備前守以下十七人が追加された。

みな毛利方の人選に、よるものである。義久等につけておいても、氣づかひないと見立てられた人達ばかりだ。

久綱、幸盛、藏人等をはじめ、十勇士などはもとより隨從をゆるされぬ。義久の北の方、京極夫人でさへも、ここで良人とひき離された。

夫人はまだ、二十一、二歳である。女の身だからといって、いかに懇願しても、毛利は許さなかつた。彼女は悲しみのあまり、寺に入つて尼となつた。

義久等の出發にあたり、殘された家臣たちとの間で、別離の盃がかはされた。大社便殿の大廣間の正面に、義久、倫久、秀久が座をしめ、隨從をゆるされた家臣二十人が、その左右にひかへてゐる。

他の四十九人は主公たちの前にあならび、一人々々が膝行して舊主の盃をうける。義久は三十にならない青年君主。倫久はやつと二十歳をでたばかり。三男の秀久は十代の少年である。

三人の世馴れぬ貴公子たちは、昨日にかはる今日の身の上に、生色をうしなつてゐる。その面やつれた、痛々しい姿の若い主君等を、配所へおくる家臣等は斷腸のおもひだ。

お盃をくださる主君も、うける家來ともに無言。毛利の軍兵が周圍をかため、きびしく見張つてゐるので、互に言ひたいこともいへない。盃をおしいただき、それを呑みほして主君にかへした後、その面前の疊にひれ伏して、いづれもはらはらと落涙してゐる。

二十二歳の鹿ノ介一人、主君から盃をうけ、大音に挨拶した。

「山中幸盛、お盃をありがたく、頂戴つかまつります」

彼はまなじりが裂けるほど、大きく兩眼をひらいて義久等の顔をみた。

「義久公は、日頃から御病弱、また倫久、秀久の兩公は御弱年。御配所へまゐられましても、よくよくお身御大切にあそばされますやう。幸盛一同、かげながらお祈り申してをります」

すると義久の青白い顔がゆがんで、二筋の涙が彼の鼻側をながれおちた。

「鹿ノ介、そち達の志は、義久、生涯忘れはせぬ。そちも、随分たつしやで……」

そして兩眼をとち、しばらく嗚咽をこらへてゐる。

九

やがて義久が、涙をのみこんで言つた。

「鹿ノ介ばかりではなく、みなみなも長い間の籠城、御苦勞でありました。國亡んでは、主君も家來もない。義久兄弟、あらためてお禮を申します」

義久の態度は、慇懃と悲痛をきはめてゐる。彼は初めて、人間の眞價を悟つたらしい。

大社の壯麗な拜殿は、この時から四十七年前の永正十六年、義久の祖父經久が建立したものである。

經久は弟の義勝とともに、流浪のうちに千辛萬苦して、尼子の家を興した。彼は臣下を愛し、彼等のためには何物も惜まなかつた。

その子の晴久は、元就にたばかられて、尼子の有力な藩屏^{はん}だつた、一族の新宮黨をほろぼし、尼子の傾く素因をつくつた。

義久もこの年の正月元旦、籠城にもつとも功勞のあつた宇山飛驒守久兼父子を殺してゐる。

宇山は十七萬八千石を領した、尼子の筆頭家老である。月山城が毛利軍に包圍されて、三年間もちこたへたのは、

宇山久兼がひそかに、但馬、丹後、若狹のはうへまでも人を派遣して、兵糧を買入れてゐたからである。

元就はこの秘密な糧道を發見して、これを斷ちきつてしまつた上、宇山飛騨守が毛利方に内通してゐるやうな反問をはなつて、義久の手で彼を殺させた。

その頃城内は士卒の逃亡が相つづき、味方同士の内訌でたがひに猜疑しあひ、人心が戦々兢兢としてゐたので主將の義久は神經衰弱になり、血迷つてしまつてゐた。

功臣の宇山飛騨守父子が暗殺されてからは、誰ももう自分の位置にやすんじてゐる者がない。いつ讒言によつて、殺されるか分らないからだ。

薰姫の父、龜井安綱もこの時、妻子をひきつれて城を退去した。他の名ある諸將も、ぞくぞくと敵に降る。そして一年ならず、開城といふことになつた。

尼子家では大社の拜殿ばかりでなく、本殿の修築にもあづかり、社領も寄進してゐる。そのやうに父祖のゆかりの深い場所で、君臣別離の宴をはるのは、運命の皮肉といふよりほかはあるまい。

父祖の榮光も、今となつては一場の夢にすぎぬ。義久は八州の太守の地位をうしなひ、敵國のとりはれ人となつた

無力な自分をかへりみ、家臣らの眞情に泣けてきてならなかつた。

沈黙と涕泣のうちに宴を終ると、はや義久達の出でである。隨從をゆるされた二十人の家臣達は、徒歩だちとなつて主君達の板輿をかつぎ、毛利の軍兵に見張られながら、大社前の松原の並木道を、まつ黒になつて消えてゆく。

境内の東西に兩手をついて、一行を見送つてゐる四十九人の中で、尼子十勇士の一人横道兵庫之助が、鹿ノ介の耳にささやいた。

「山中殿、ここから安藝へは、唯一筋の赤穴街道。國境にはだかる深山道で、御主君達をうばひかへさうでは御座らぬか」

十

大社からの出雲街道は、今市、三刀屋、掛谷、頓原、赤穴峠を越えて安藝の吉田につづいてゐる。

元就が出雲へ攻めいる時にも、三段に陣をとつて、この街道をすすんできた。沿道の諸城には、尼子方被官の豪族らがよつてゐたが、みな敵にくんだり、毛利の支配に服してゐる。